

学生参加の大学づくり
(21世紀、新しい知をめざして：
静岡大学開学55周年記念 公開講座・シンポジウム)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 健悟 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008606

「学生参加の大学づくり」

静岡大学生 南 健悟

南と申します。こういう場に学生が出るというのは非常に珍しくて、私自身も非常に緊張しておりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

私がまず静岡大学に期待するものとしたしましては、意見発表の場が足りないのではないかと。その意見発表の場を増やすべきだと思っています。大学というのは中学、高校と違って、先生方から一方的な講義を受けるだけではありません。逆に学生からも能動的な意見発表ができる場所であると考えております。私は一昨年度及び昨年度、人文学部にあります模擬裁判実行委員会に携わって参りました。まず模擬裁判というものは、裁判劇を通じて自らの意見などを裁判によって表明するものです。一昨年度については最近話題になっております裁判員制度、昨年度は小樽や浜松でありました外国人差別問題について意見発表をして参りました。私はこの模擬裁判という場所が大学内の一意見発表の場と思っています。しかし、私のような場合はかなり例外だと思っています。一般的な学生はこのような大学内における意見発表の場はないのではないかと、少ないのではないかと考えています。したがって、学生の意見発表を行う場をもう少し設けては良いのではないかと。例えば、同じ学部内、学科内において自らの意見を発表できる場、つまり、先生方が参加されるような学会のようなものに、それが本当に出来るかどうかは別として、学生も参加できるような仕組みがあればと考えております。このような学術発表の場というものもあるかと思ひますし、大学というのは学術研究というものの他に、大学を利用する立場、これに語弊があるとすれば学生も一構成員としているわけですから学術的なものに限るのではなく、大学運営においても学生の意見が反映されるような制度も必要であると思ひます。憲法上、大学の自治は認められていますけれども、これは先生方のものだけではなく、学生にとっても認められてもいいのではないかと考えています。そこから考えれば、学生も大学運営に少しでもタッチできるようなものが重要です。たしかに、高度に専門的な運営について学生が関わるのは難しいというのも重々承知していますが、学生の関わるような運営については学生の意見などを聞き入れることのできる制度も必要だと考えています。例えばですが、政府が最近行うようになってきましたパブリックコメント手続です。国民に対してこういう制度や法律が出来ますがこれに意見がありますか、というような手続きがありますが、このようなものが大学にあった方が良いのではと思ひます。

ところで、これらの意見発表の場がもし大学に設けられたとしても、学生側がそれを利用しなければ何ら意味のないものとなってしまいかねません。先程晝馬さんがおっしゃったように、私がもし大学を卒業して売りに出された場合、100万の価値がつくのか、20万の価値がつくのかちょっと分かりません。多分20万の方だと思いますけれども、20万つくだけでもいいでしょうかね。1万とか2万とかかもしれないですけど、そういう価値しかないのではちょっと困りますので、学生側もそれを利用して意見発表できるような意識改革が必要なのではと思ひています。現在の学生の中には自らの意見を持たないで周りに同調する者がいるということも事実です。

先日、人文学部の資料室の奥に、大学の諸先輩方が書かれた静岡大学学生新聞という非常

に古い新聞を見る機会がありました。その記事には学生の意見が多く紹介されていて、現在の学生にはない大学に対する熱意というものがひしひしと感じられました。それを見て今の学生を見ると、その熱意が一部の人しか全く感じられないと私は正直思っています。私が見たのは今から30年くらい前の新聞で、教養部がまだ存在し、大岩にキャンパスがあった時の新聞なのですが、その記事の中では、学生たちが意見を表明したり、いろいろな議論を戦わせていました。もしかしたら今もあるのかもしれませんが私の知る限り学生新聞は今も発行されていないと思います。そういった場がない、意見発表する場がないというのは非常に残念であると思います。学生も自らの意見を討論できる場で議論することが、今回のシンポジウムの題にもなっています「新しい知の創造」の方法であると個人的に思っております。

諸外国の例、と言えるほど素晴らしい例ではありませんが、昨年観光でロンドンに行くことがありました。そのロンドンでナショナルギャラリー、国立美術館を訪れた際に、小学生くらいの団体が、世界史や資料集でよく見ることが出来るのですが、ホルバインという方の「大使たち」という絵の前に座って、ギャラリーの職員からその絵画について講義を受けていました。そして一通り職員の講義が終わると、その職員の方が意見や質問があるかとその小学生に聞くと、ほとんどの子が手を挙げるわけです。日本では授業の場においてでもそうではけれども、質問や意見をすることがほとんどありません。大学という場所が能動的な意見発表が出来る場だと考えている一方、実際の講義の場ではほとんど意見や質問がない。つまりは小学生や中学生の時と全く同じような授業が延々と続けられていくような授業を多々見受けられます。そういうことに対して、静岡大学には先程のナショナルギャラリーの職員による質問や意見募集を行うような機会、そして、ギャラリーで見た小学生のように学生にはそれに対して自らの意見が言えるような意識が、これからの静岡大学、静岡大学に限らず現代の学生には必要であるし、そういった意識を望みたいと思います。以上です。

松田：

どうもありがとうございます。学生の意見を発表する場を作って欲しい、大学運営に学生の参加を、ということですが、同時に学生自身の努力も必要であるということでした。ここには日本の大学が抱えているもっと深いものが潜んでいるように思います。では最後に、静岡大学長、天岸先生から「新生静岡大学の進む道」ということでお話しを頂きます。